

パートナーシップで進めるまちづくり

京まち工房 51

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

特集 京町家保全・再生に向けた国際協調プロジェクト



まちづくりイベント
京町家まちづくり散歩 2010 春
まちかどアルバム

まちづくり報告
修徳自治連合会 修徳まちづくり委員会
豊かな自然環境と集落景観、地域活力ある小出石の将来ビジョンを探る
まちの歴史や思い出を新住民や後世に伝える工夫

コラム
私と京都
ふっきーの徒然なるままに

<http://machi.hitomachi-kyoto.jp/>

日本都市計画学会功績賞を授賞！

(財)京都市景観・まちづくりセンター理事長 三村浩史

長年にわたる都市計画分野の研究と教育および町並み保全などの実践が評価され、2010年度の日本都市計画学会功績賞を授けられました。



ひと・まち交流館 京都 図書コーナー

まちづくりや建築、市民活動、福祉などに関する図書を備え、閲覧、貸出サービスを行っています。月毎の企画展示でオススメの図書を紹介しています。

平日・土 10:00～20:30
日・祝 10:00～17:00
第3火曜日休み



TEL: 075-354-8703
<http://www.hitomachi-kyoto.jp/>

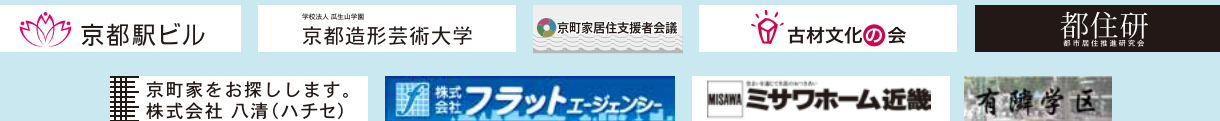
まちセンコミュニティFM放送 (FM79.7MHz)

まちづくりチョビット推進室の放送枠をお借りして京都のまちづくり活動を紹介。

京都三条ラジオカフェ
放送 第2・第4土曜日 15:30～16:00
第2・第4日曜日 7:00～7:30

過去の放送分はこちらでお楽しみいただけます。
<http://www.kohsei-const.co.jp/chobitto/chobitto.html>

賛助団体



京兔物語 ペンネーム ひこ

昔の姿を取り戻した
ある古びた町家が



多額の寄付が
出されたのだ
ある団体から



でも
そのウラに
あったことを
わたしたちは
忘れない



みなさん
一人一人の
想いが
あったことを



(財)京都市景観・まちづくりセンター

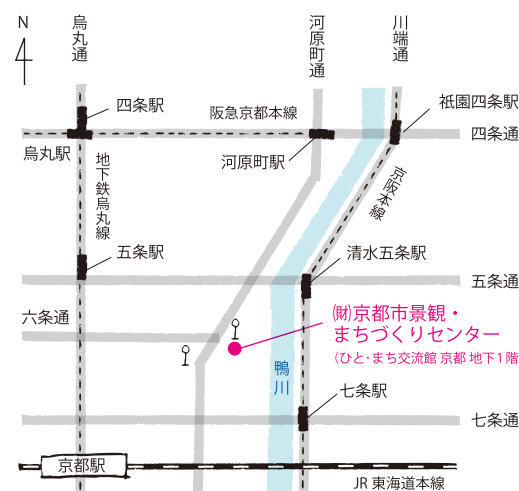
〒600-8127
京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1
(河原町五条下る東側) ひと・まち交流館 京都 地下1階

TEL: 075-354-8701 FAX: 075-354-8704

開館時間 平日・土 9:00～21:30
日・祝 9:00～17:00

休館日 毎月第3火曜日(国民の祝日にあたるときは翌日)
年末年始(12月29日～1月4日)

交通系統 バス 市バス4・17・205号系統「河原町正面」下車
電車 京阪電車「清水五条」下車 徒歩 8分
地下鉄烏丸線「五条」下車 徒歩 10分



センターへお越しの際は公共交通機関をご利用ください。



京都市景観・まちづくりセンターは環境負荷低減に努めています。



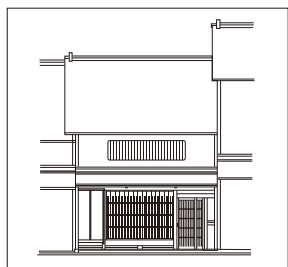
いい湯だった〜(銭湯)
たまには銭湯にいきまセントね
なんちゃって。



左から門川市長、エンジー副理事長（WMF）、小島事務局長（京町家再生研究会）、三村理事長（京都市景観・まちづくりセンター）、稲垣日本代表（WMF）



修復予定の釜座町の町家



修復完成予定図

特集

京町家保全・再生に向けた国際協調プロジェクトがスタート

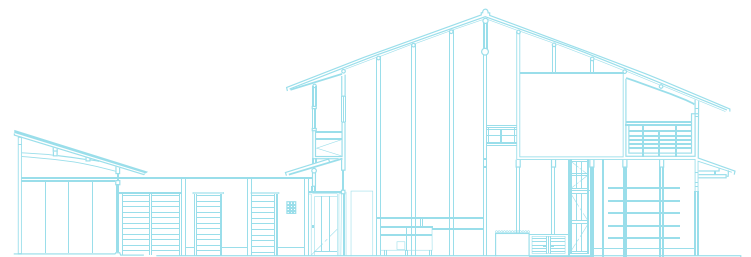
世界の歴史的建造物などの文化遺産の保護・保全活動を行っているワールド・モニュメント財団（WMF）から「京町家再生プロジェクト」に対し、総額25万ドル（約2,300万円）の支援を受けることが決まりました。歴史都市・京都の景観の基盤であり、京都の伝統的な建築様式や生活文化を今に伝え、京都の大きな魅力である「京町家」の持つ文化的価値が世界的に認められたと言えます。この支援を受けて、釜座町町内会、NPO法人京町家再生研究会及び、当センターが協働して、修復活動を含む伝統技術と文化の継承を目指す「京町家再生プロジェクト」に取り組むこととなりました。

平成22年5月10日、京都市役所にて支援金授与式が行われました。WMFからヘンリー・エンジー副理事長、稲垣光彦日本代表、ワールド・モニュメント・ウォッチ・リスト（WMW）【京まち工房49号参照】申請者の小島富佐江さん（NPO法人京町家再生研究会事務局長）、「京都の宝である京町家が世界の宝と認められ、大変うれしい」とコメントされた門川大作京都市長、当センターの三村浩史理事長が出席されました。

支援金授与式でのヘンリー・エンジー副理事長のスピーチ（右頁）に、京町家への造詣の深さと熱意を感じました。

釜座町町家の修復を重要なモデルに、そして、多くの方々に京町家再生プロジェクトの取組に関わって頂き、保全・再生の輪を広げることで、WMFの期待に応えていきたいと思えます。

文 = 西井明里



京町家再生プロジェクト

釜座町の町家修復

町家は町内会の持ち物であり、会合や地藏盆などに使用されている。今回修復する釜座町の町家は、中規模で典型的な京町家であり所有者である町内会の資金を加え修復が行われる。町内会では町内会長を含む釜座町町家修復プロジェクトチームが発足した。

（修復予定期間：平成22年6月～11月）

町家活用プログラム

京町家の伝統や豊かな暮らしの文化を伝え、地域の次世代の担い手を育成する取組など、京町家の普及・啓発活動を行う。なお、修復過程を記録し、教育ツール（冊子、DVDなど）の作成も行う。

町家って？

近世における町方の町会所（集会施設）のこと。

町席とも呼ばれる。

参考：京のまちづくり史

WORLD MONUMENTS FUND

ヘンリー・エンジー WMF 副理事長より

素晴らしい建造物は素晴らしい文化を象徴するとよく言われます。しかし京町家は、単にその独特な建築様式だけでなく、市民の日々の住まいとして機能し、京言葉も響きわたり、そこには地域社会との調和が感じられるなど、単に文化を象徴するという以上、都市があるべき姿を素晴らしい形で残していると言えます。

世界中の人々から認められ賞賛されている京町家を私たちWMFが知ったのは、私どものワールド・モニュメント・ウォッチ・リスト（WMW）というプログラムを通じてです。WMFに世界中からよせられた応募は、独立した第三者的な審査パネルで評価され、このままにおいては失われる大事な文化遺産の現状を伝え、それを守るために支援の輪を広げる必要のある、最も大事な文化遺産をリスト掲載に推薦します。2010年WMW選考パネルの誰一人として京町家の推薦をためらうことはありませんでした。それは建築上、歴史的な重要性の観点からも、またこの歴史的景観がこのままでは失われてしまう、またはその可能性が高いと認識したからです。

今回の財団法人京都市景観・まちづくりセンター（Kyoto Center for Community Collaboration=KCCC）への助成金は2010年WMWに選定された文化遺産の中でもいち早く、また助成金額としてもその中でも最大です。それは、京町家の大事さが国際社会の中で認められ、それを支援しようという強い思いがあるということです。今までの活動経験から、文化遺産の保護・保存・再生にはそれが所在する地域社会との強いパートナーシップが欠かせないことは明らかです。KCCC、NPO法人京町家再生研究会、京都市など地域社会の市民との強いコラボレーション（協働）は、歴史的な文化遺産を保護することの成功モデルとなることに、私たちも大いに期待しており、その思いが今回の助成支援に繋がりました。

私たちはまだスタートラインに立ったばかりです。まだまだ課題に直面するでしょう。京町家が継承されるということは、京都の社会生活に大きな比重を占める建築的、文化的遺産が継承・存続されるということです。

国際的な文化遺産分野に携わる一人として、京町家の美しさ、重要性は京都市民のみでなく日本全国の人々にとっても、また世界中の人々にとっても大切にされるべきものと思います。また今回の協働再生作業を通じて私たちは多くのことを学ぶことができると思います。そしてこのプロジェクトが日本のほかの地域社会、また世界中の歴史的都市における景観保存のモデルとなると思います。

授与式スピーチより抜粋 訳：稲垣光彦 WMF 日本代表



WMFより支援の授与証書



京町家まちづくりファンドの取組

京町家まちづくり散歩 2010 春

— 陶器のまち・五条坂の散策 —



諏訪蘇山邸

ゲスト
諏訪蘇山さん(左)
ここから
2コースに分かれて出発!

京町家
まちづくりファンドって?

京町家を受け継ぎ、引き継いでいこうとする方々の「思い」を「かたち」にするための基金です。



ガイド
清水保孝さん(左)



河井寛次郎
記念館



六兵衛窯



ガイド
河崎尚志さん



登り窯

平成22年3月、「京町家まちづくりファンド」をたかさんの方に知っていただき、京町家をキーワードに、その地域の生活や文化の背景をお伝える「京町家まちづくり散歩」の一環で、3月27日にガイド付きツアーを実施しました。参加費の一部は、当ファンドへ寄付させていただきました。期間中、当ファンドへの特典や募金箱を設置していただきました五条坂周辺の店舗や参加者のみなさまには、この場を借りて感謝申し上げます。

今回のツアーは、五条坂周辺をピックアップし、当ファンドで町家を改修された、陶・点睛かわさき店主の河崎尚志さんと陶芸家の清水保孝さんのガイドで、五条坂の歴史、陶器、町家暮らしについてお話をし

ながら、まち歩きを楽しくナビゲートしていただきました。陶芸家の諏訪蘇山さんをゲストに迎え、京都市の歴史的意匠建造物でもある京町家の自邸で、五条坂の歴史と作品のお話をしていただき、2コースに分かれて「河井寛次郎記念館」、「六兵衛窯」、「登り窯」などを見学しました。地元ならではの飛び入りガイド、路地への寄り道もありつつ、普段見過ごしている五条坂の一面を知ることができました。五条坂には、何代も続く陶芸家、扇子の老舗や職人さん、和菓子の名店、お麩屋さん、京料理屋さんなど、伝統文化を守ってこられた方々がたくさんおられます。そして、少し寄り道すると、趣のある町家を思いがけず見つけることができます。五条坂の歴史を感じながらの散策、お勧めです!

文=西井明里



まちかどアルバムって?

老若男女が各々のまちの思い出写真を持ち寄り、住んでいるまちの過去・現在・未来に思いを馳せ、語り合い、地域の魅力の再発見と住民交流のきっかけづくりの取組。

景観・まちづくりシンポジウム 3/7開催!

まちかどアルバム

— よみがえれ「まち」の記憶! 写真が語る、写真で語ろう —

平成19年度よりスタートした「まちかどアルバム」。平成21年度は、5地域(「各地域での取組」参照)の皆さんが取り組み、シンポジウムでは皆さんの活動発表が行われました。また、今回は立命館大学と京都府京都文化博物館との共催で実施し、各専門家の方のご協力を得て古写真の読み解きやデータ化などにも取り組みました。

第1部では、まちづくり、地理学、民俗学、考古学の専門家*の視点から古写真を読み解くパネルディスカッションを、第2部では3つの分科会に分かれて5地域の取組紹介、地域の方をお招きした座談会を行いました。当日の来場者は約120名。明治から昭和に撮影された写真を囲みながら、来場者にも様々なまちの記憶がよみがえり、活気と一体感のあるシンポジウムとなりました。

「まちかどアルバム」は、写真があればいつでも取り組める、とても身近なまちづくりへの第一歩。皆さんも眠っているご自宅のアルバムを、ひも解いてみませんか?

文=大屋みのり

* 中村伸之氏(ランドデザイン)、河原典史氏(立命館大学准教授)、南博史氏(京都文化博物館 学芸課主任学芸員)、村上忠喜氏(京都市文化市民局文化財保護課文化財保護技師)、山田章博氏(市民空間きょうと)

各地域での取組

団体名	取組内容
京極住民福祉連合会 まちづくり委員会	まちの隠れた歴史を掘り起し、世代を超えた交流につなげる
久我・久我の杜・羽東師地域 まちづくり協議会(歴史文化部会)	開発の進む地域における、新旧住民の交流をはかる取組
稲荷学区稲寿会連合会	老人会でまちの歴史・記憶を共有し、写真を活用して交流を促進
龍池学区大恩寺町町内会	町内会で保管している写真、映像を大切に、気軽に集まれる場づくりへ
西陣地域住民福祉協議会	西陣まちかどアルバムパネルを元西陣小での常設展示で活用

第1部 パネルディスカッション



専門家の皆さんによるパネルディスカッション

第2部 取組紹介・座談会



気軽に集まれる場づくり(大恩寺町)



昭和40年頃の風景(久我)



写真の活用方法紹介



パネルにして常設展示(元西陣小)

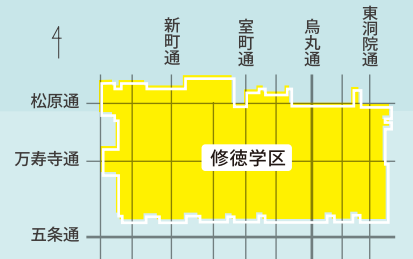


あ!お風呂が壊れちゃった...

修徳自治連合会 修徳まちづくり委員会

「修徳まちづくり憲章第2部」の策定

修徳自治連合会では、これまでまちづくりの指針としてきた「修徳まちづくり憲章第1部」をバージョンアップし、「修徳まちづくり憲章第2部」を策定しました。第2部は、町並み編と安全・安心編の2つで構成されています。



町並み編

景観資源を活かした 町並みのルールづくりと町並み形成の実践



(平成22年2月策定)

修徳まちづくり委員会では、町並みを、歴史的資源と自治の伝統を抛り所に営々と築きあげてきた暮らしの表現だと捉え、修徳らしい「町並み」を創り上げる仕組みづくりに取り組んでいます。これまでの主体的な活動の土壌の上に、町並みの保全と創造の活動として、ワークショップやアンケートで住民の意向を確かめ、『町並み編』を策定しました。修徳で建築活動を行う際のルールや住民みんなで話し合いながら町並み形成を進めるための具体的な指針となります。また、住民のコンセンサスを創りあげることが、

— 「規制ルール」から「創造ルール」へ —

「将来にわたる仕組み」と、その仕組みを保証する「将来にわたる担い手」の育成にも繋がります。この活動を三次元CG/VRの町並み検討ツールやまちづくりの方法の指導で支援する京都大学大学院門内研究室、建築の専門家の立場で支援する(社)京都府建築士会、公的機関が支え、「地域住民・専門家・行政」の協働による活発な「まちづくり」が展開されています。

修徳自治連合会関係者のコメント

近年の経済状況の変動とともに、居住する人々の家族構成の変化によって余りにも早く変貌するまち、同じ地域に住んでいながら物事に対する考え方の温度差の拡大、これらがもたらす「協働意識」の希薄化に、いち早く対応して成し遂げることができた、いわば集大成が、『まちづくり憲章第2部』の完成であります。地区整備計画のような規制ではなく、そこから1歩踏み込み、合意によるまちづくりの将来像を描くことができました。これからは、今後起こりうる案件に対して、この憲章に沿った「修徳まちづくり」の検証が肝要であると考えております。

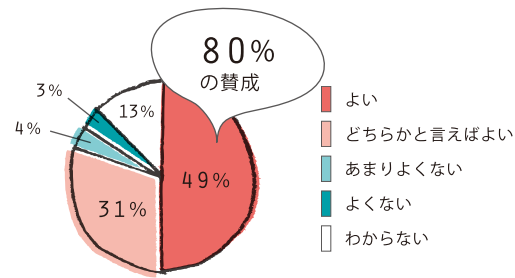
修徳自治連合会 前会長
平井常夫

『まちづくり憲章第2部』の完成は、到達点であると同時に、出発点として、画期を刻みました。しかも、「みんなで作った」が実感です。その「みんな」のなかに、学区民とともに、都市づくり推進課、センターなどの公的機関、京都大学大学院門内研究室、府建築士会などの専門家が含まれ、この「協働のかたち」が、今後、修徳学区が実現しようとする内容を京都市の条例に準ずるものにする可能性を含みます。自治連合会の今後の活動に期待しています。

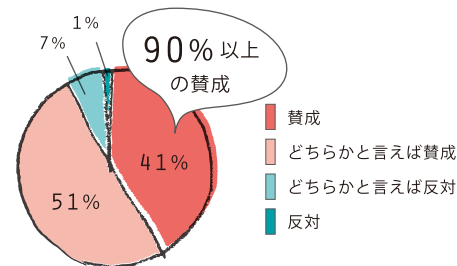
修徳自治連合会 前まちづくり委員会委員長
小西宏之

1 住民へのアンケート

修徳町並み文化財の取組について



「まちづくり憲章（町並み編）」について



2 まちづくり委員会によるワークショップ

3次元CGモデル上の敷地に設計案を配置し、様々な景観シミュレーションを行いながら、修徳学区にふさわしい建築と町並みのデザインを探求していきます。



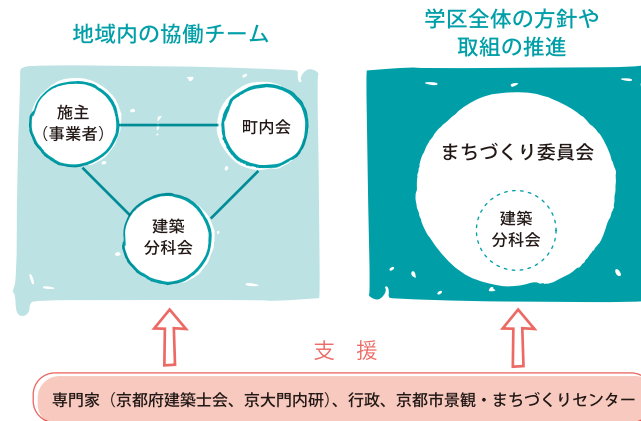
3次元CGモデル（門内研究室作成）の町並みに、これから建つと予想される建物の設計等をあてはめ、検証する。



修徳学区の通りごとの連続写真（門内研究室作成）を見ながら、町並みの特徴や、問題点を話し、将来の町並みのあり方について意見を交換する。

3 町並み形成の取組を進める体制

地域内の日常的な建築活動に関して動くチームと、学区全体の方針づくりや取組の推進を担うまちづくり委員会の大きく2本立ての体制で進めます。



安全・安心編

かけがえのない 「ひとりの命」も失われない対策を



(平成22年3月策定)

修徳まちづくり委員会では、「日常できないことは、災害時にもできない」という意識のもとづく危機管理と自主防災や防犯、交通事故防止のための地域の意識の持ち方と、地球温暖化防止を積極的に推進する対策を盛り込んだ『安全・安心編』を策定しました。災害時に必要となる助け合いは日常のつながりが大切と呼びかけています。

修徳学区

修徳まちづくり憲章第2部の町並み編、安全・安心編の詳細は修徳学区ホームページでご覧下さい。
http://kyoto-machisen.jp/chiki_hp/syutoku_HP/syutoku_top.htm

よし、今日は銭湯に行こう



私、銭湯初めて。楽しみ♪
it's first time for me!

豊かな自然環境と集落景観、 地域活力ある小出石の将来ビジョンを探る

— 大原小出石町の地区計画 —

近年、山間部の集落では過疎化や高齢化が急速に進み、それによって地域活力の低下や後継者の不足、地域コミュニティの維持が困難になってきているといった課題が上げられています。そうした状況を受け、大原学区では平成19年からこれらの課題に対し検討会や意見交換を行ってきました。小出石町は大原学区の中でも小規模でまとまりがあり、また、かねてから地区外からの居住者を受け入れ、集落の活性化を図りたいという機運があったため、京都市で初となる「市街化調整区域※における地区計画制度」の導入に向け京都市と共に検討されることになり、当センターも地域の会合に参加し専門家を派遣するなどのお手伝いをしてきました。今回は、その地区計画策定に向けた地域の取組を紹介します。



小出石町の町並み



市街化調整区域って？

市街化を抑制すべき区域であると同時に、農林業を振興し、緑豊かな自然環境を育成・保全すべき区域です。

1 まちづくりビジョン 「小出石十二門暮し」の作成

小出石町では、平成20年10月に「小出石町ビジョン検討委員会」を設置し、長期的な集落の将来像を模索すべく、地域の歴史や人口の推移等について調査してきました。あわせて、町内にある八幡宮の宮司さんを囲んで小出石町の歴史や文化について語り合い、町民に対してもアンケート調査を行いました。その成果として、住民が将来の小出石町のビジョンを共有してイメージできるよう、キーワードを集め十二箇条にまとめた「小出石町十二門暮し」を作成しました。
(平成21年3月)



800年前に、十二軒の氏子により開かれた小出石の八幡宮。現在も十二門の屋号が引き継がれている。

2 地区計画検討委員会の立上げ

平成21年5月には、委員会の名称を地区計画素案の具体的検討に向けて「小出石町地区計画検討委員会」へと変更し、昨年度は17回にわたる委員会開催と、その取組内容を地域住民へ向けて情報発信する『小出石まちづくりニュース』を10回発行しました。さらに、地元住民との意見交換会を4度にわたり設けるなど、積極的に住民や地権者との合意形成も図ってきました。その結果できあがった地区計画素案には、区域の設定や道路配置、建築物の用途から容積・建ぺい率、意匠形態に至るまで地元の方々の意見を盛り込み、且つ小出石の周辺環境に配慮し、住民が愛着を持っている集落の景観を守り続けていくためのルールが作成されました。



小出石まちづくりニュース

3 要望書提出

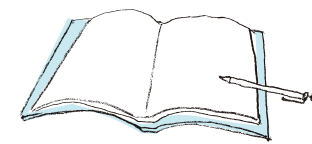
平成22年3月に「大原小出石地区 地区計画要望書」を京都市長へ提出しました。委員会からは「十二門暮し」をこれからの町民の精神的支柱としていくことが重要と感じていることのほか、住民にとっての土地との結びつきの強さ、集落維持のためにも新住民を受け入れたいといった希望や、地域住民のみによる調査・協議等の難しさといった課題についても伝えられました。今後、都市計画局が都市計画決定に向けて手続きを進め、関係機関との協議・調整を行っていきます。



地区計画要望書の提出(左より委員会青山氏、原田氏、岡本氏、田辺京都市都市計画局長)

まちの歴史や思い出を 新住民や後世に伝える工夫

— 城巽学区の紹介冊子「わがまち城巽」づくりの取組 —



わがまち城巽

地藏盆や時代祭など習俗祭礼に限らず、お町内や学区の歴史や自治活動は、もともと地域にお住まいの方には、当たり前かもしれませんが、ところが若い方やマンションなど新しく地域に来られた方にとっては聞く機会がなかったりして必ずしも常識ではありません。地域の歴史や自治活動を知って、はじめて地域への関心が生まれることもあります。今回は昨年度に当センターのまちづくり活動助成を活用して、城巽学区自治連合会が行った、お町内や学区の歴史や自治活動を紹介する冊子「わがまち城巽」づくりを紹介します。

取組は「マンション住民に地域への参加を呼び掛けたい」という自治連合会会長の思いから始まりました。当初は自治連合会の理事やこれまでまちづくり活動に関わっていたメンバーが中心になっていましたが、回覧板で編集委員会のスタッフを募集した結果、マンションにお住まいの方も含め新たなメンバーも加わりました。

編集委員会は月1回のペースで行いました。検討を重ねるうちに、地域の歴史記録やなつかしい写真など、長くお住まいの方も知らなかったことが次々出てきました。当初はマンションなどの新住民向けの簡単なパンフレットを想定していましたが、広く学区民に向けて地域の歴史や活動を後世にまで伝えられる冊子にするために、頁数を増やしじっくり1年かけて取り組むことになりました。その結果、学区だけでなく、学区内全町の歴史や活動も1町に1頁をさいて紹介できました。

また単に冊子を作るだけでなく、編集の過程で集まった写真や資料を展示した「城巽大博覧会」や、取材をかねて地域を歩いた「城巽町歩き」も開催しました。「城巽大博覧会」では、普段は個人のお宅や町内で收藏されている貴重なお宝も展示され、なつかしい写真の上映も行われ、住民が地域の魅力を感じる貴重な機会になっていました。

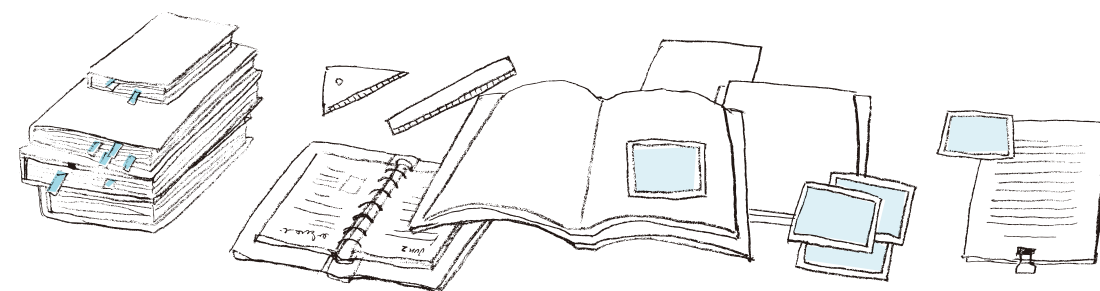
文 = 田中志敬



城巽大博覧会の様子



完成した冊子を取り喜び、編集委員会のみなさん



今後

今回策定された地区計画のルールを基に、委員会では今後もこれらのルールの具体的運用と活性化へ向けたビジョンを模索し、今年度も継続して活動・検討を行っていきます。多世代が住まう活気ある集落の実現と同時に、良好な自然・集落景観と住環境が今後も継続的に維持されていくことを住民の皆さんが望んでいます。

文 = 木戸環希



私と京都



京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 准教授
矢ヶ崎 善太郎

京都で建築を学ぶ、ということ

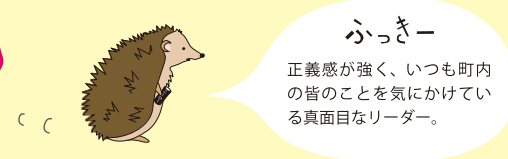


田舎の高校を卒業し、二年間の東京生活を経験後、京都に来て建築を学ぶことになった。もう三十年も前のことである。なぜ京都を選んだのかは覚えていないが、「建築を学ぶなら京都がいい」というある建築家のことばを新聞で読んだことがきっかけだったような気がする。いずれ建築家になるのだろうと、自分の将来像を漠然と考え描いていたが、一方で大工さんのような職人さんたちの仕事や木の建築とはずっと関わっていたい、という気持ちはいつも持っていた。実家が工務店をやっており、鉋や鋸を手に木と格闘している大工さんの仕事を見て育ったからだろうか。結局、建築史を教える立場になってしまったことで、建築家になるという漠然とした夢は消えうせたわけであるが、幸いに大工さんや木の建築と関わりを持ち続けることはできている。建築史とは、我々の先祖たちがそれぞれの時代の建築的要求に対してどのように応えたのか、その試行錯誤のあとを冷静に検証するものである。建築史を学ぶのは、単に知識として建築名や様式を覚えるのではなく、これからの建築のあるべき姿を冷静に見極める判断力を身につけるために必要不可欠な作業であると思っている。日本の木造建築は、長い年月の間に修理などの手がいく度も加えられながら維持され使われ続けている。修理はその時代の最新の技術と思想をもって行われている。つまり長く生き続けてきた建築にはいろいろな時代の技術と思想が同居しているのであり、ことあるごとに工事を手掛けてきた職人さんた

ちの技と知恵がいくつも集積しているのである。伝統建築には、今あるものを如何に使い続けるか、つまり持続可能な建築システムを生み出すための創意と工夫がぎっしりと詰まっているといってもよい。そのような先人たちの技と工夫を身体で感得しながら建築を学ぶ方法に「実測」がある。建築に直接触れ、間近で観察しながらかたちや寸法、プロポーシオンを学び、伝統的な建築行為を追体験する。そしてその建築が長年維持され、使われ続けてきた原理をさぐるという、なんとも贅沢で何にも代えがたい学習方法である。このようなかけがえのない体験は、さまざまな伝統建築が身近に多く存在している京都だからこそできることである。数年前に京都の町家の再生保存に関する活動をお手伝いしたとき、町家というのは、手入れがしやすく更新しやすいようにできていることを知った。今、京都の町家が商業施設あるいは観光資源として注目され、その姿が守られ続けることは喜ばしいことである。しかし伝統建築の真価は経済効果だけにあるのではなく、持続可能な建築の原理が潜む貴重な建築資源なのだ、というところにある。京都で建築を学ぶ学生たちには、実測という機会をできるだけ多く体験し、そして京都から、これからあるべき建築の姿を発信してもらいたいと念じている。それは京都で建築を学んでいるからこそできることなのである。「建築を学ぶなら京都がいい」ということばは偽りではなかったと確信している。

ふっきーの徒然なるままに

第4回 自然との共生 — 進化 —



ふっきー
正義感が強く、いつも町内の皆のことを気にかけている真面目なリーダー。

私たちの寄って立つこの地球は、未だ天と地が分かれざる古から、水火混沌とした時を経て現在に至り、生きとし生けるものにその慈恵を与え続けてきた。しかし、それは決して過保護的なものではなかった。地球の環境は、直接的或いは間接的な要因により幾度となく変動を生じ、氷河期も数度経験している。今の地球は何度目の氷河期に向かう途上にあるとも言われている。

その悠久の時の流れの中で地球上の生物は、それぞれの特性に合わせた自然淘汰を繰り返すことによって適応形質を保存発展させ、進化し続けてきたと学説に言う。

さてこの進化であるが、もとより、古い時代のものを捨て新しいものに挿げ替えていくということではない。それまでのあらゆる経験を遺伝子として残しながら変化する新たな状態を受け入れ、それを新たな経験としてそれに対する適応能力を積み重ねていくものである。最近、このことを人の脳の構成を例に説明されているのを聞いた。これについての説明は避けるが、つまり、進化とは、

新しいものに置きかえるということではなく、伝統的に継承してきた優良な環境共生能力の上にその時代時代の自然環境に対応する共生能力を生み積み重ねていくものなのである。今、その共生能力が衰退してきているという。それは、人類が飛躍的に発展させてきた科学の力に過信し、人としての共生能力を高めようとするのではなく、周囲の自然環境を遮断して個々の理想的環境づくりへと環境をコントロールしようとする傲慢さが招いているのであろう。問題が深刻なのは、人はこのことを人類自身に対するもののみではなく、食物などの動植物にも及ぼしているということである。その昔、「品種改良が食糧危機を招く」という本が話題に上ったことがあった。人とは、どうしても近視眼的に「今」の利欲を追求しようとする癖がある。今一度、千年の将来を見据えた自然との共生の意味を考え、何が進化のベースとなるべき優良な伝統なのかを問い直す必要がある。万物の霊長としての責任において。

マチ右衛門のつぶやき



マチ右衛門
京町家に住んでいる、扇子屋さんの4代目。我家の活用法について画策中。

センターに来て、早くも二カ月が過ぎました。九州、関東と移り住んで憧れの地「京都」なのですが、たくさん期待と不安でいっぱいです。これまでは、完全に観光客として来ていたので、住むことになっているんな楽しみ方を見つけようと心を躍らせている日々です。といいつつ、まだほとんど回っていないのですが…。ということは、地名や通り名も覚えきれていないのですが…。ぼちぼち楽しみながら、早く覚えたいところです。ただ、京都は本当に心が落ち着くなあというのが正直な感想です。「京都の都市景観の本質は町家である」と、大学院時代の恩

師が言っていました。極端かもしれませんが、京都に町家がなくなったらどうなるだろう？ということ想像してみると、当たり前のように町家が壊されている状況が少しばかり怖くはならないでしょうか。単に、建物だけ消えていくのではなく、そこに詰まった「思い」や培われてきた「文化」まで失われるような気がしてなりません。町家の本質的なものを十分に認識し、勉強し、その上で新たに創造するという姿勢を忘れずに、センターの一員として頑張ろうと思っています。一人でも多くの京都の人の笑顔に出会えることを期待して。(N・H)

